

# 令和8年度病害虫発生予報 第1号（4月予報）

令和8年3月25日  
青森県病害虫防除所

## 【概要】

水 稲：細菌性の苗立枯病はやや多い、フザリウム・ピシウム属菌等の苗立枯病及びばか苗病は平年並と予想される。

りんご：モニリア病は平年並、腐らん病はやや多いと予想される。リンゴコカクモンハマキ、ミダレカクモンハマキは平年並、キンモンホソガ、リンゴハダニは平年よりやや多いと予想される。

野 菜：にんにくの春腐病は津軽地域でやや少ない、県南地域で少ない、さび病は平年並と予想される。

## 1 予報内容

### (1) 水 稲

病害虫名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
苗立枯病 (フザリウム・ ピシウム属菌等)	県内全域	—	平年並	①向こう1か月の気温は平年より高いと予想される(±)。
苗立枯病 (もみ枯細菌病) (苗立枯細菌病)	県内全域	—	やや多い	①前年の発生量は平年より多かった(+) ②向こう1か月の気温は平年より高いと予想される(+)
ばか苗病	県内全域	—	平年並	①前年の本田における発生量は平年並であった(±)。

### (2) りんご

病害虫名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
モニリア病 (葉腐れ)	県内全域	やや早い	平年並	①りんごの発芽は平年よりやや早いと予想される。 ②前年の実腐れの発生量は平年並であった(±)。 ③向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想される(±)。
腐らん病 (枝腐らん)	県内全域	—	やや多い	①3月中旬の発生量は平年よりやや多い(+)
リンゴコカクモン ハマキ	県内全域	やや早い (越冬巣からの 脱出)	平年並	①向こう1か月の気温は平年より高いと予想される。 ②越冬幼虫量は平年並である(±)。
ミダレカクモンハ マキ	県内全域	やや早い (越冬卵のふ化)	平年並	①向こう1か月の気温は平年より高いと予想される。 ②越冬卵塊量は平年並である(±)。
キンモンホソガ	県内全域	やや早い (越冬成虫羽化)	やや多い	①向こう1か月の気温は平年より高いと予想される。 ②前年秋の発生量は平年よりやや多かった(+)
リンゴハダニ	県内全域	やや早い (越冬卵のふ化)	やや多い	①向こう1か月の気温は平年より高いと予想される。 ②越冬卵量は平年よりやや多かった(+)

### (3) 野菜

病虫害名	予報内容			予報の根拠
	発生地域	発生時期	発生量	
(にんにく) 春腐病	津軽地域	—	やや少ない	①越冬前の巡回調査における生育量は平年より少ない(—)。 ②消雪時期は津軽地域で平年並からやや遅く(±)、 県南地域で平年より早い(—)。
	県南地域	—	少ない	
(にんにく) さび病	県内全域	—	平年並	①越冬前の発生量は平年より少ない(—)。 ②向こう1か月の気温は平年より高く、降水量は津軽地域でほぼ平年並、県南地域で平年並から多いと予想される(+)

※ 予報の根拠内の気象情報は、3月19日発表の1か月予報による。

発生量に対し、(+):多くなる要因、(-):少くなる要因、(±):多少に大きく影響しない要因

## 2 防除のポイント

薬剤名の後に記載している括弧内の数字・記号は、有効成分の作用機構分類RACコードを示す。なお、混合剤等、複数の有効成分を含む剤はコードをカンマで区切って併記した。FRAC農業用殺菌剤作用機構分類及びIRAC農業用殺虫剤作用機構分類の最新版はクロップライフジャパン(旧農薬工業会)ホームページ(<http://www.crop-life-japan.org/lab/mechanism.html>)を参照。

### (1) 水稲

《 3～4月の防除作業 》

3月	4月					
6半旬	1半旬	2半旬	3半旬	4半旬	5半旬	6半旬
塩水選	浸種	催芽・は種	出芽・緑化	硬化		

◎種子消毒

◎ フザリウム・ピシウム属菌による苗立枯病の防除

△ リゾープス属菌等  
細菌性苗立枯病菌による苗立枯病の防除

△ イネドロオイムシ  
イネミズゾウムシ防除(床土混和・は種時処理)

△ いもち病(は種前・は種時処理)

△ いもち病(緑化期処理)  
イネドロオイムシ  
イネミズゾウムシ

注: ◎印は必ず防除する。

△印は前年の発生状況及び品種に応じて防除する。

防除薬剤は農作物病虫害防除指針等を参照するか、指導機関に問い合わせる。

#### 【浸種】

- ① 水の量は、種もみの2倍かそれ以上の容量とする。
- ② 消毒後の浸種は流水を避け、水の交換は始めの2日間を行わない。その後は3日に1回程度、静かに水の入れ換えを行う。
- ③ 浸種中の水温が低いと消毒の効果が低下するおそれがあるので、10℃以下にならないようにする。

#### 【催芽】

- ① 芽や根を伸ばし過ぎると、は種時の芽や根の折れを招き、雑菌に感染しやすくなるので、催芽は鳩胸程度とする。

### 【 フザリウム・ピシウム属菌による苗立枯病の防除 】

- ① 土壌のpHを5.0前後に矯正する。
- ② タチガレエースM粉剤 (F:32,4) 又はナエファイン粉剤 (F:U17) をは種前に土壌混和するか、タチガレエースM液剤 (F:32,4) 又はナエファインフロアブル (F:U17)、ヘッド顆粒水和剤 (F:21, I:28)、オラクル顆粒水和剤 (F:21) をは種時にかん注する。(ただし、ヘッド顆粒水和剤、オラクル顆粒水和剤は苗立枯病(フザリウム菌)の農薬登録はない。)
- ③ 発病のごく初期にタチガレエースM液剤 (F:32,4) をかん注する。なお、タチガレエース剤 (F:32,4) は、粉剤と液剤それぞれ1回しか使用できない。
- ④ 育苗中の温度管理を徹底し、また、乾燥・過湿を繰り返さないようにする。

### 【 リゾープス属菌による苗立枯病の防除 】

- ① 傷もみの混入が多いと多発しやすいので、傷もみが多い場合は、種子として使用しない。
- ② 厚播きすると発生が多くなるので、基準のは種量を守る。
- ③ ダコニール粉剤 (F:M05) をは種前に土壌混和するか、ダコニール1000 (F:M05) をは種時～緑化期にかん注する。
- ④ 高温、過湿で多発するので管理に注意する。

### 【 もみ枯細菌病・苗立枯細菌病菌による苗立枯病の防除 】

- ① 細菌病に効果のある種子消毒剤で消毒する。
- ② カスミン粒剤 (F:24) をは種前に土壌混和するか、は種後覆土前に種もみの上から均一に散粒する。
- ③ 育苗中の温度管理を徹底する。特に高温、過かん水にならないように注意する。

### 【 ばか苗病の防除 】

- ① 前年は、自家採種や温湯消毒を行っている一部の農家のほ場で発生が目立った。
- ② 温湯消毒や生物農薬は、化学合成農薬に比べて防除効果が不安定である。効果を安定させるため、処理方法や消毒後の管理方法を厳守する。
- ③ スポルタック乳剤、トリフミン水和剤及び乳剤は、薬剤感受性低下菌が確認されているため、前年までに効力の低下が認められた場合は別の薬剤を使用する。
- ④ 育苗中の発病苗(徒長苗)は見つけ次第抜き取る。

### 【 は種時または緑化期におけるいもち病(葉いもち)の防除 】

- ① いもち病抵抗性「中」以下の品種を作付する場合、箱施用剤や水和剤による予防防除を行う。
- ② 薬剤耐性いもち病菌への対策を地域一帯となって実施する。

#### 【 薬剤耐性いもち病菌への対策 】

Q o I 剤耐性菌が東北地域でも確認されている。

本県における耐性菌の発生を未然に防ぐため、地域一体となって以下の対策を実施すること。

ア Q o I 剤は1年ごとに作用機構の異なる薬剤とローテーションで使用するとともに、育苗期から本田期を通じて年1回以内の使用に止める。

① これらの成分を含む本田散布剤は、多発時の使用を避ける。

② オリブライト剤 (F:11)、アミスター剤 (F:11) は同一系統剤とみなす。

イ 種子流通に伴い耐性菌が広範囲に伝播することがあるため、採種ほ及びその周辺ではこれらの成分を含む薬剤は使用しない。

ウ 自家採種は耐性菌発達の原因となるので、種子更新、塩水選及び種子消毒を行う。購入種子(他県産稲、飼料用稲を含む)でも必ず種子消毒を行う。

エ Q o I 剤を使用した水田において、いもち病(葉いもち、穂いもち)が多発生した場合には、罹病葉(穂)を採取し、病虫害防除所又は関係指導機関に連絡するとともに、他系統薬剤で追加防除を行う。

### 【 は種前～緑化期におけるイネドロオイムシ、イネミズゾウムシの防除 】

- ① 例年発生が多いほ場や本田での防除が労力的に難しい場合には、箱施用剤(粒剤・水和剤など)により防除を行う。

## ☆ポジティブリスト制度に関わる注意点

育苗後、苗床跡に他作物を栽培する場合の箱施用剤は、以下のいずれかで処理する。

- ① は種時～育苗期間に処理する場合は、箱施用した農薬が置床にこぼれ落ちないように、また、かん水とともに置床に浸透しないように、プール育苗にするか、置床にビニルなどの無孔シートを敷く。
- ② 移植時に処理する場合は、ハウス外で行う。ハウス内で行う場合は、ビニルなどの無孔シート等の上で行い、置床に農薬がこぼれ落ちないようにする。

## (2) りんご

### 【 モニリア病 】

- ① 消雪を早め、園地の排水に努め、地表面の乾燥を図る。
- ② 「展葉1週間後頃」は葉腐れの防除上最も重要な時期なので、トップジンM水和剤又はベンレート水和剤を適期に散布する。
- ③ 葉腐れは見つけ次第摘み取り、処分する。
- ④ 「開花直前」にSDHI剤（フルーツセイバー、ロンセラーフロアブル、カナメフロアブル、パレード15フロアブル）を散布する。

### 【 腐らん病 】

- ① 「展葉1週間後頃」にトップジンM水和剤又はベンレート水和剤を散布する。
- ② 薬剤だけに頼ることなく、常時園内を見回り、早期発見、早期治療を行う。また、肥培管理、被害枝及び剪定枝の処理など総合管理に努める。
- ③ 剪定した切口にはその日のうちにバッチレートを塗る。
- ④ 粗皮削りは必ず行う。
- ⑤ 胴腐らんは見つけ次第泥巻きを行うか、削り取って塗布剤（フランカットスプレー、バッチレート、トップジンMオイルペースト）を塗る。

### 【 黒星病 】

- ① 菌密度を低下させるため、できるだけ早く越冬落葉を除去するかすき込む。なお、落葉収集機を利用すると被害落葉を効率的に収集できる。（令和4年度 指導参考資料参照 <https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/nourin/nosui/files/R4-ks3.pdf>）  
又は、フロンサイドSC若しくは宮内石灰硫黄合剤を落葉に散布する。（令和8年度 参考となる研究成果参照 <https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/nourin/nosui/files/R8-ks3.pdf>）
- ② 重点防除時期である「展葉1週間後頃」から「落花20日後頃」まで散布間隔を守る。
- ③ 「展葉1週間後頃」にチウラム剤（チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル）を散布する。
- ④ 「開花直前」にSDHI剤（フルーツセイバー、ロンセラーフロアブル、カナメフロアブル、パレード15フロアブル）を散布する。

### 【 ハマキムシ類 】

- ① 剪去枝には越冬幼虫や越冬卵が残っており、これを園地に残しておくとならぬので、発生源になるので、幼虫の活動が始まる前の4月上旬までに処分する。
- ② ミダレカクモンハマキの発生が多い園地では、「開花直前」及び「落花直後」にロムダンフロアブル又はBT剤（ファイブスター顆粒水和剤、バイオマックスDF）を選択し、同一薬剤を連続して使用する。

### 【 キンモンホソガ 】

- ① 発生が多い場合は、「展葉1週間後頃」にバリアード顆粒水和剤又はIGR剤（デミリン水和剤、ノーモルト乳剤）を使用する。
- ② 開花期から落花直後頃の間根ばやを切り取る。

### 【 ギンモンハモグリガ 】

- ① 前年秋季の発生が多かった場合は、「展葉1週間後頃」にバリアード顆粒水和剤又はIGR剤（デミリン水和剤、ノーモルト乳剤）を使用する。

【 リンゴハダニ 】

- ① 「展葉 1 週間後頃」にマシン油乳剤（ラビサンスプレー、ハーベストオイル、トモノールS、アタックオイル、スプレーオイル）を散布する。
- ② ナシマルカイガラムシ防除剤で「発芽前」にハーベストオイル、トモノールS、アタックオイル、スプレーオイルのいずれか50倍を使用すると「展葉 1 週間後頃」のリンゴハダニの防除は必要ない。

【 クワコナカイガラムシ 】

- ① 粗皮削りをしながら越冬卵をすりつぶし、削り落とした粗皮は処分する。
- ② 越冬卵の発生が多い園地では、「展葉 1 週間後頃」にアプロードフロアブルも使用する。

【 リンゴクビレアブラムシ 】

- ① 発生が多い園地では、「展葉 1 週間後頃」にバリアード顆粒水和剤を使用する。

【 ナシマルカイガラムシ 】

- ① 前年に果実被害がみられた園地又は樹では、越冬幼虫を対象に、「発芽前」にハーベストオイル、トモノールS、アタックオイル、スプレーオイルのいずれかを使用する。

参考表 りんごに使用する農薬の作用機構分類

<殺菌剤>

農薬名	有効成分	FRAC コード	系統名
トップジンM水和剤	チオファネートメチル	1	SDHI剤
ベンレート水和剤	ベノミル	1	
フルーツセイバー	ペンチオピラド	7	
ロンセラーフロアブル	フルキサピロキサド	7	
カナメフロアブル	インピルフルキサム	7	
パレード15フロアブル	ピラジフルミド	7	
バッチレート	有機銅	M01	
フランカットスプレー	ポリオキシシンD亜鉛塩	19	
トップジンMオイルペースト	チオファネートメチル	1	
フロンサイドSC	フルアジナム	29	
宮内石灰硫黄合剤	多硫化カルシウム	UN	
チオノックフロアブル	チウラム	M03	チウラム剤
トレノックスフロアブル	チウラム	M03	

<殺虫剤>

農薬名	有効成分	IRAC コード	系統名
ロムダンフロアブル	テブフェノジド	18	I G R 剤
デミリン水和剤	ジフルベンズロン	15	
ノーモルト乳剤	テフルベンズロン	15	
アプロードフロアブル	ブプロフェジン	16	
ファイブスター顆粒水和剤	B T (生菌)	11A	B T 剤
バイオマックスDF	B T (生菌)	11A	
バリアード顆粒水和剤	チアクロプリド	4A	ネオニコチノイド剤
ラビサンスプレー	マシン油	-	マシン油乳剤
ハーベストオイル	マシン油	-	
トモノールS	マシン油	-	
アタックオイル	マシン油	-	
スプレーオイル	マシン油	-	

注) FRAC農業用殺菌剤作用機構分類及びIRAC農業用殺虫剤作用機構分類の最新版はクロップライフジャパン (旧農薬工業会) ホームページ (<https://www.croplifejapan.org/labo/mechanism.html>) を参照。

### (3) 特産果樹

#### ○ ぶどう

##### 【 晩腐病 】

- ① 架線の巻きひげ、成り跡、被害枝の切り取り、剪定枝の処分などの作業を徹底する。
- ② 「休眠期」は重要な防除時期であるので、樹体に薬液が十分かかるようにていねいに散布する。「キャンベル・アーリー」では、デランフロアブル又はパスポート顆粒水和剤を散布する。「スチューベン」及び「シャインマスカット」では、デランフロアブル、パスポート顆粒水和剤、ベンレート水和剤のいずれかを散布する。

#### ○ おうとう

##### 【 灰星病 】

- ① 樹上のミイラ果を摘み取って処分し、菌密度の低下を図る。
- ② 越冬菌核の子のう盤（キノコ）形成を抑制するために、早春に園地を清掃・耕起し、乾燥を図る。
- ③ 「開花直前」にオーソサイド水和剤80又はチウラム剤（チオノックフロアブル、トレノックフロアブル）を散布し、「満開5日後頃」にパスワード顆粒水和剤、オンリーワンフロアブル、ラリー水和剤、オーシャイン水和剤のいずれかを散布する。
- ④ 花腐れ防止のため、「満開5日後頃」の薬剤散布は時期が遅れないように適期に行う。また、雨の多い場合は晴れ間を見て散布する。

##### 【 コスカシバ 】

- ① 開花前までにフェニックスフロアブルを樹幹部に薬液が十分かかるように手散布する。

#### ○ もも

##### 【 せん孔細菌病 】

- ① 風を強く受ける地帯で多発するので、防風網の設置などの耕種的対策を徹底する。
- ② 春型枝病斑は葉や果実への伝染源となるので、見つけ次第、枝ごと切り取って処分する。
- ③ 「開花直前」に I C ボルドー412を散布する。

##### 【 コスカシバ 】

- ① 開花前までにフェニックスフロアブルを樹幹部に薬液が十分かかるように手散布する。

参考表 特産果樹に使用する農薬の作用機構分類

#### <殺菌剤>

農薬名	有効成分	FRAC コード	系統名
デランフロアブル	ジチアノン	M09	
パスポート顆粒水和剤	T P N	M05	
ベンレート水和剤	ベノミル	1	
オーソサイド水和剤80	キャブタン	M04	
チオノックフロアブル	チウラム	M03	チウラム剤
トレノックフロアブル	チウラム	M03	
パスワード顆粒水和剤	フェンヘキサミド	17	DMI 剤
オンリーワンフロアブル	テブコナゾール	3	
ラリー水和剤	ミクロブタニル	3	
オーシャイン水和剤	オキシボコナゾールフマル酸塩	3	
I C ボルドー412	塩基性硫酸銅	M01	

#### <殺虫剤>

農薬名	有効成分	IRAC コード	系統名
フェニックスフロアブル	フルベンジアミド	28	ジアミド剤

注) FRAC農業用殺菌剤作用機構分類及びIRAC農業用殺虫剤作用機構分類の最新版はクロップライフジャパン（旧農薬工業会）ホームページ（<https://www.croplifejapan.org/lab/mechanism.html>）を参照。

## (4) 野菜

### ○ にんにく

#### 【春腐病】

- ① 越冬前の生育が旺盛で積雪期間が100日を超えると、越冬中に凍雪害を受けて腐敗株が発生しやすい。
- ② 消雪が遅いほ場や排水の悪いほ場では、滞水しないよう排水に努める。
- ③ 消雪後の腐敗株は、伝染源となることがあるので抜き取る。
- ④ 抜き取り後、降雨が予想される場合には天候を見ながら予防散布を実施する。
- ⑤ 新たな腐敗株を認めた場合は、早急に抜き取り、7日おきくらいに薬剤散布を実施する。
- ⑥ 有機物の過剰投入や窒素過多等で生育が旺盛なほ場では多発する傾向があるので、予防散布に努める。

#### 【さび病】

- ① 消雪の早い地域や消雪後気温が高い日が続く場合は、初発時期が早まり多発する傾向がある。
- ② ほ場内を見回り、新葉に発病が見られたら防除を実施し、早期まん延を防止する。

### ー トマトキバガの発生にご注意ください!!ー

トマトキバガのトマトの育苗期や定植後早期での発生が懸念されます。  
早期発見、初期防除を徹底してください。  
診断と対策については、令和8年1月12日付け令和7年度防除指導情報第2号を参照してください。  
令和7年度病虫害防除指導情報 第2号「トマトキバガの発生状況と防除対策について」  
<https://www.nounavi-aomori.jp/farmer/archives/14936>

### ★農薬を使用する際には必ず最新の農薬登録情報を確認してください★

農林水産省「農薬情報」 [https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n\\_info/](https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/)  
農林水産省「農薬登録情報提供システム」 <https://pesticide.maff.go.jp/>

### ☆農薬散布時は農薬の飛散防止対策をしてください☆

学校、保育所、病院、公園等の公共施設内の植物、街路樹並びに住宅地に近接する農地（市民農園や家庭菜園を含む）及び森林等において、農薬の飛散を原因とする住民や子ども等の健康被害が生じないように、飛散防止対策を徹底しましょう。農薬散布に当たっては、事前に周辺住民に対して、農薬使用の目的、散布日時、使用農薬の種類及び農薬使用者の連絡先等を幅広く周知するとともに、近辺に化学物質に敏感な人が居住していることを把握している場合には、十分配慮しましょう。

☆クロルピクリン剤の安全使用について☆

本県では、ながいもやごぼう等の根菜類の作付けが多く、土壌病害を防除するため、クロルピクリンが使用されていますが、その使用に当たっては次の事項を遵守しましょう。

<使用上の注意>

- 処理作業は、気温・地温の低い午前中か夕方に行う。
- 使用時は、防護マスクや防護メガネ等を着用する。
- 揮散したガスは低地にたまりやすいため、農地近郊の低位置に人家や畜舎等がある場合は使用しない。
- 降雨等により地下水や河川等に流入するおそれがある場合は使用しない。
- 人家や畜舎等に近接する農地での使用を避けるとともに、人家や畜舎等の近郊では、それらが風下になる場合は作業を一時中断する。
- 使用後は、直ちにポリエチレンフィルム等（厚さ0.03mm以上の厚めのもの、難透過性のもの）で被覆するなど、揮散防止のために必要な措置を講じる。
- 使用済みの空き缶等は、周囲に影響を及ぼさないよう適切に処分する。
- トラック等で薬剤を運搬する場合は、薬剤が脱落しないよう確実に固定して積載する。
- 施錠可能な冷暗所に保管する。

《当情報に関する問い合わせ先》

青森県病害虫防除所 TEL:017-729-1717 FAX:017-729-1900  
〒030-0113 青森市第二問屋町4-11-6  
E-mail: byogaichu@pref.aomori.lg.jp

※当情報は、青森県農業・就農情報サイト「農なび青森」  
(<https://www.nounavi-aomori.jp/>) に掲載しています。